



Title	『毎月集』 「のどかにて」 詠の再検討
Author(s)	北島, 紬
Citation	詞林. 2019, 65, p. 31-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71478
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『毎月集』「のどかにて」詠の再検討

北島 紬

一、はじめに

『毎月集』は曾禰好忠（生没年不詳、平安中期の歌人）の自撰歌集で、一年の各月を「上／はじめ」・「中」・「下／をはり／はて」の三句に分けて一句あたり十首を詠み、さらに四季の冒頭にはそれぞれ長歌と反歌を置くという極めて整った構成をもつ。好忠の歌風の特徴として、万葉風の素朴さ、漁業・農作など労働民の具体的生活へ注目した歌材、初期百首歌人らしい言語遊戯性、低官に留まる我が身を訴える沈淪訴嘆の傾向などが指摘され、「生活派歌人」と称されることもある。しかしながら、従来不遇を嘆く内容として理解されている歌の中にはその詠作意図が明らかでないものも存在している。本稿では『毎月集』夏部の一首を取り上げ、その内容および詠作方法について改めて考察を試みたい。

以下、和歌および歌番号の引用は新編国歌大観（日本文学Web図書館）によるが、便宜のため一部表記を改めたこと

ろがある。

二、『毎月集』一三九歌の理解について

『毎月集』夏部には暑気詠や納涼詠などが多く収められているが、その中の一首、

のどかにてすずしかりけり夏の日も思ひあつかふこともなき身は

〔毎月集〕夏・五月中・一三九）
は、次の『白氏文集』八五二「苦^レ熱^レ 題^レ恆寂師禪室^一」の漢詩を典拠としていることが既に指摘されている。

人人避^レ暑走如^レ狂

獨有^二禪師不^レ出^レ房

可是禪房無^二熱到^一

但能心靜即身涼

しかし、当該歌について『曾禰好忠集全釈』（以下『全釈』）の「評」は「低官でなすこともなく、夏の一日を暮す自分を自嘲的に詠んだのであろうか」と述べ、当該歌に好忠の沈淪

詠嘆傾向の一端を見ている。

また『曾禰好忠集』注解（以下『注解』⁴）も当該歌の「補説」として次のように述べる。

好忠以前に、同じ白氏の句を翻案した歌には「但能心静即身涼／我が心静けきときは吹く風の身にはあらねど涼しかりけり」（千里集三四）がある。ただし好忠詠には、やや自嘲的な口吻が感じられるか。

つまり、暑さを避ける人々に対してひとり高僧が自若の境地にあることを称えた白居易の原詩やその翻案である大江千里詠に対し、好忠詠には「低官の身は思い悩むことがなく『のどか』であり、そのため夏も涼しい」という自嘲が込められているとする見方である。しかし、その理解は果たして妥当であろうか。

「ずしき」の理由として白詩が「心静」、それを受けた千里歌が「心静けき」という語を用いているところ、好忠は「のどかにて」と詠み変えてある点がまず注目される。『古今集』在原業平「世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」、紀友則「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」の二首が最も著名かつ典型的であるように「のどか」とは和歌においてはもっぱら文字通りの意ではなく、むしろのどかならぬ現実を前提とした空想や、のどかな事物とは対照的な何ものかを詠むために用いられる語である。「のどか」を否定する理由となる対象物はさまざまだが、

例えば恋の苦悩などはその代表であった。

夢にだに見る事ぞなき年をへて心のどかに寝る夜なけれ
ば
〔後撰集〕巻第九・恋一・一五三八

女三のみにこ 敦慶の親王

浮き沈み淵瀬に騒ぐ鳩鳥はそこものどかにあらじとぞ思
ふ
〔同・巻第一四・恋六・一〇二七〕

のどかなる時こそなけれ富士の山いつかは絶えむ燃ゆる
思ひの
〔源順百首〕查冠歌・恋・五五八

このことを踏まえれば、好忠もまた「のどか」の語に実際にはそれに相反した心情を込めていたとする見方も肯けなくはない。ただし、それを沈淪詠嘆とただちに結びつけることにはいささかの躊躇いを覚える。第四句「思ひあつかふ」に着目すると、『毎月集』において直接に「あつさ」が詠まれるときは、単なる暑気の意としてではなく恋の趣向とともに用いられていることに気付くからである。

夏衣うすくや人の思ふらん我はあつれて過ぐすべき日を
〔毎月集〕四月をはり・一一五

燃ゆれども煙も立たぬ夏の日のあつさぬるさをしのびて
ぞふる
〔同・六月中・一六七〕

すなわち一三九歌は、白詩の翻案である「のどかにてずし」の語句に、恋の表現「思ひあつかふ」を合わせ用いることよって、対照の面白みを狙ったものと考えられるのではないか。

三、一三九歌の周辺と『毎月集』の歌群

問題の一三九歌のある夏・五月中（一三五―一四四）は、他にも純粹な季節詠と恋歌とが混在する部分となっている。

全体像の把握のため煩雑とはなるが今ここに十首を掲げ、特に問題としたい歌についてはそれぞれ別に番号を付した。

- 一三五 やまがつのほてにかりほす麦の穂のくだけでも
のを思ふころかな（※①）
- 一三六 我がまきしあさをの種を今日みればちえにわか
れて影ぞすずしき
- 一三七 大原やせがぬのみぐさかきわけて折りやたたま
しすずみがてらに
- 一三八 をだまきりかけて手引きし糸よりも長しや夏の
暮るる待つ間は（※②）
- 一三九 のどかにてすずしかりけり夏の日も思ひあつか
ふこともなき身は
- 一四〇 かりにても思へばこそは夏草のしげれる中を分
けつつもくれ（※③）
- 一四一 蝉の羽のうすら衣になりにしを妹と寝る夜の間
どほなるかな（※④）
- 一四二 来たりとも寝る間もあらじ夏の夜のありあけの
月はかたぶきにけり（※⑤）
- 一四三 かげきよき夏の夜すがらてる月をあまのとわた

る舟かとぞ見る

一四四 わがせこがきませりつるか見ぬほどに庭のこぐ
さもかたまよひせり（※⑥）

一三九「のどかにて」詠の前後はとくに恋の趣向が強く、それも恋の終わりの時期を夏の景物によそえて詠む歌がまつまっている。

①一三五歌の「ものを思ふ」は対象が明らかでなく、②一三八歌については「一般に日暮れを待つ歌は、男女が逢瀬を待ちわびる心情を詠んだものが多い」とはいうものの、『毎月集』は季節詠として夏の暑さに堪えかねる心情を詠むこともある。しかし①②について保留するとしても、その後一三九歌に続く③、④、⑤の三首は明らかに男女それぞれの立場で恋の終わりがけた頃を詠んでおり、連作的な捉え方が可能である。

③一四〇歌は「かりそめにも貴方を思えばこそ」と訴えているが、この「かりにても」の語句はかえって情熱が既に冷めていることの証明となつていよう。女性の立場から「かり」の男の薄情を詠む歌は『毎月集』にしばしば見える。

見るままに庭の草葉はしげれども今はかりにもせなは来
まさず
（『毎月集』四月はじめ・九六）

かりに来と思ひし人のたえにしを草葉につけてしのぶこ
ろかな
（同・一〇四）

一三九歌「思ひあつかふこともなき身」もまた恋歌におけ

る情熱の類型的表現である「思ひ（火）」を、その情熱の失われた恋の終わりに応用したものとして読めば、この連作の一部として解釈できる。⑥一四四歌も含め、男女の立場を入れ替え、種々の歌材を用いて単調にならないよう配慮がなされてはいるが、十首全体として恋の終わりの歌群としてのまとまりをもった箇所とみるべきであろう。

このように同じ趣向の歌を近い位置に置くことで連作風に仕立てた箇所が『毎月集』には他にも見られる。はじめの秋・七月（一八七―一九六）における三首（一九〇、一九三、一九四）がそれである。先と同様、引用にあたって歌番号とは別に番号を付した。

一九〇 空をとぶをとめの衣ひと日より天の川波たちぞ

よるらし（※⑦）

一九一 おきてみんとおもひしほどにかれにけり露より

けなるあさがほの花

一九二 あさぼらけ萩の上葉の露みればややはださむし

秋のはつかぜ

一九三 秋をへて雲居に聞きはわたれども波に朽ちせぬ

天の岩橋（※⑧）

一九四 よさの海にきつつなれけんをとめごが天の羽衣

干しつらむやぞ（※⑨）

⑦、⑧、⑨はいずれも似通ったモチーフを持っており、金子英世氏は『毎月集』秋部の七夕詠はいずれも、好忠所縁

の地である丹後・天の橋立周辺に見られる、羽衣伝説と融合した七夕伝説を背景に成立している可能性が認められる」と指摘する。

すなわち、「をとめ（こ）（織女）」は、七月一日より「空をとぶをとめの衣」（天の羽衣）の準備に着手し（一九〇）、七夕当日、その衣を纏い、「天の岩橋」を眼下に下界に降り立った（一九三）。「をとめ（こ）」はそこ（与謝の海）で水浴し、翌七月八日にその衣を干した。……集中歌相互の関係性に注目することで浮上してくる、斯くの如き物語性もまた、『毎月集』を特徴付ける一要素としてよいいのではなからうか。

さらに金子氏は『毎月集』には、七夕以外にも、一つの主題が複数の歌にわたって系列を成している例が見出される⁹⁾ことを述べられており首肯される。

はやく北条諦応氏が『毎月集』に「一句十首の歌群の中に幾つかの歌題の流れを交錯させて、同一の歌題の歌を単純にならず適当に隔て、場所や地名などによって空間的な広がりをもたせるとともに、それらを有機的に関連づけながら、歌群としてのまとまりをもたせていこうという意図」を指摘し、その構成を「十首によってその句間の情景や季節感を表現しようとしたもの」とされたが、そこに織り込まれる歌題は四季の季節感や年中行事といった「歳時記的な」ものに限らない。仮に典型的な季節詠であれば多少の連続は当然であ

ろうが、同主題の恋歌を季節に寄せて詠む例がとりわけ多く認められる。例えば八月中を見ると、

二三三 我がせこが来まさぬ宵の秋風は来ぬ人よりも恨

めしきかな（※10）

二三四 肌寒く風は夜ごとになりまさる我が見し人は訪

れもせず（※11）

二三五 三歳生ひの駒をばつなぎなつて引きて引き来る秋

の関の下水

二三六 待つ宵の風だに寒く吹かざらば見え来ぬ人を恨

みましやは（※12）

⑩、⑪、⑫と「独り寝のため風の寒さを恨む」女歌群が続いている。さらに中の冬・十一月をはり、

三二九 さ夜中にせなが来たらば寒くともはだへを近み

袖もへだてじ

三三〇 けを寒み冴えゆく冬の夜もすがら目だにもあは

ず衣うすれて

この二首も「寒さの中男を待つ」主題であろう。三三〇歌は「貧困な、冬の厳しい生活に耐えて行かなくてはならない苦しみ」とされることもあるが、衣の薄さは多く人の心薄さに通じるものとして詠まれており、また第四句「目だにもあはず」には「逢はず」がかけられていると解せよう。

以上のような歌群は純粹な季節詠ではなく、それぞれの季節にふさわしい恋の状況を設定して感情の奥行きをも持たせ

たものであり、既に指摘されているように好忠が『毎月集』の詠作にあたって屏風歌の素材を撰取したのみならず、季節詠に恋愛の場面を連想させるといふ方法の面でも大いに影響を受けた可能性が考えられる。

四、『毎月集』における『白氏文集』等の受容の方法

最後に、一三九歌の解釈にあたり、好忠によるその他の白詩受容の特徴を確認しておきたい。

あらげにて焼生に見えし春の野も夏はいろいろ花さきに
けり（『毎月集』くれの春・三月をはり・八六）

右歌は『白氏文集』卷一三・律詩・六七一「賦」得古原草、送別」を典拠とする。

離離原上草 一歳一枯榮

野火烧不盡 春風吹又生

遠芳侵古道 晴翠接荒城

又送王孫去 萋萋滿別情

ここでは元の白詩の送別詠としての性格は消え、さらに春から夏にかけて若干の季節の移動が行われている。また、
けを寒み冴えゆく冬の夜もすがら目だにもあはず衣うす
れて（再掲）

（『毎月集』中の冬・十一月をはり・三三〇）
これは同じく『白氏文集』卷第五六・二六二「早寒」が典拠とされる。

黄葉聚_レ牆角_一 青苔圍_レ柱根_一

被_レ経_レ霜後薄_一 鏡遇_レ雨来昏_一

半卷_二寒簷幕_一 斜開_二煖閣門_一

迎_レ冬兼送_レ老_一 祇仰_二酒盈_レ樽_一

冬の寒さを衣の薄さで表現する白詩の方法を取り入れた上で、早寒題が冬のさなかに詠み変えられ、さらに寒さを凌ぐため必要なものは酒ではなく夫であるらしい。単なる日本語への置き換えに留まらず、主題に変化を持たせることが『毎月集』の常であった。

以上を見るに、一三九「のどかにて」歌もまたこれらと同様、白居易の原詩を恋歌の類型表現を用いて詠み換え、かつ全体として恋の終わりの構成を成す夏部・五月中の十首の歌群の中に当該歌を入れ込んだものである。これにより一首の歌の中に前後の文脈による広がりが生まれるとともに、「恋の思いに焼かれることのない身は、夏であつてものどかに涼しい」という意が裏に響くこととなる。

先行の諸研究がそこに沈淪や自嘲の意を読んできたのは、歌そのものよりも『毎月集』の長歌や「好忠百首」序に引きずられてのことであろう。好忠を初め、初期百首歌人の歌風には遊戯的な側面があると指摘され、その評価についても既に多くの論考があるが、個々の歌の読解には必ずしもその成果が生かされていない恐れがある。屏風歌をはじめとする既存の和歌や漢詩文といった先行作品を換骨奪胎し、さらに季

節と人事を縦横に組み合わせて独自の作品世界を構築するところに好忠という歌人の一つの特性があるのであつて、一見低官の身の不遇を嘆くような内容であつても、それを作者の実感を素朴に詠み出したものとのみ理解するには慎重であるべきである。

五、まとめ

一三九「のどかにて」歌は表面上は白居易の詩を受容して詠作された暑気詠と考えられるが、単純な翻案ではなく夏部・五月中の全体で緩やかな連作となることを意図して構成されており、原詩の持つ雰囲気や恋の終わりの歌群の中に置くことで生まれる面白さを意図したものである。

今回は『毎月集』一三九歌のみを検討したが、恐らく『好忠百首』、『つらね歌』等についても同様、詠作方法が作者の実生活・実体験に由来する部分なのか、あるいは先行作品の撰取で説明可能なものであるのかを区別する努力が必要ではないだろうか。

注

- (1) 川村是生「田園のうた」『藝文研究』六五巻、一九九四年三月
- (2) 岡村繁『新釈漢文大系 白氏文集(三)』明治書院、一九八八年
- (3) 神作光一・島田良二『曾禰好忠集全釈』笠間書院、一九七五年

- (4) 川村是生・金子英世『曾禰好忠集』注解』三弥井書店、二〇一一年
- (5) 多く恋歌と解される。ただし『注解』補説「恋の寓意は少し深読みにすぎようか。逆に恋の歌の趣向や表現を応用した暑気詠と解する方が自然であると思われる。」
- (6) 『注解』当該歌語釈
- (7) 一、二、四「夏の日の昔の根よりも長きをぞ衣ぬぎかへ暮らしわびぬる」など
- (8) 金子英世「曾禰好忠『毎月集』の特質について（二）…七夕詠をめぐって」『藝文研究』一〇一巻、二〇一一年二月
- (9) 「秋部における駒牽関係歌、冬部における修行者詠など」（同稿）。前者は二二二、二三五、二三七、後者は二九四、三三九、三四三、三四四が指摘されている
- (10) 北条諦応「『毎月集』の構成と表現」『平安朝文学研究』二巻四号、一九六七年二月
- (11) 『全釈』
- (12) 松本真奈美「曾禰好忠『毎月集』について―屏風歌受容を中心に―」『国語と国文学』六八巻九号、一九九一年九月、同氏「重之百首と毎月集」『国語と国文学』六九巻一〇号、一九九二年一〇月

（きたじま・つむぎ 本学大学院博士後期課程）